

# 今世紀に引き継ぐ戦争の本質 —戦争のリアリティを知ろう—



## ●日本の敗北は朝鮮人の解放

太平洋戦争末期、私は中学生であった。軍需工場に動員され、銃砲の照準器の部分品をつくっていた。米軍機の激烈な反復空襲にさらされた。同級生から死者を出した。自分も近く本土決戦で死ぬものと覚悟していた。担任教師からは、陸軍か海軍のどちらかを選ぶよう迫られた。10代半ばで、死が間近にあった。

1945年8月15日、戦争が終わった。当時、私は大阪市生野区猪飼野に住んでいた。私たち日本人は敗戦を悲しみ、虚脱状態におちいていた。ところが、あちこちの朝鮮人が住んでいる家々からは、ささやかにではあるが、夜を徹して酒を飲み、歌いおどっている声がきこえてきた。「朝鮮人はなにをしてるんや」ときいた私に、父は「朝鮮人は勝ったんや」と答えた。日本人にとっての敗戦は、朝鮮人にとっては勝利であり、解放だったのである。「日本人も朝鮮人も同じ大日本帝国の臣民である」と思い込まされていた私にとっては、驚天動地の出来事であった。日本人と朝鮮人の混住のまち、猪飼野に住んでいたからこそその体験であった。中国をはじめ、アジア・太平洋地域の人々の多くにとって、日本が戦争に敗北したことは大きな喜びであったという事実を忘れてはならない。

## ●旧兵士の戦場体験

戦争が終わって、生きて帰ってきた歴戦の旧兵士たちは、年下の私に戦場体験を語ってくれた。戦後10年近くたって、私には結核療養所で過ごした1年間の時期がある。入院中、起居をともしただけに、私より10歳余り年長の療友たちから、戦場の話をきくことが多かった。

4人部屋のとなりのベッドの会社員は、華南地方を転戦した擲弾筒兵だったといい、おかげで片方の耳が

難聴になったとのことだった。集落を襲撃して、皆殺しにした話をしてくれた。

また、私が見せてもらった華北の野戦病院院長（軍医大尉）の1937年10月28日の日記には、「20歳ぐらいの正規兵」の中国軍兵士を一人捕らえた話が書かれている。戦線が錯綜したため、所属部隊からはぐれて、日本軍の野戦病院近くに迷い込んだ中国軍兵士が捕虜になったのである。すると、野戦病院に収容されている日本軍傷病兵たちが「俺がやる、俺がやる」と殺気だった。つまり、その捕虜を「俺が殺す」と競争になったのである。院長の軍医大尉は、興奮した傷病兵たちに捕虜を渡した。結局、日記には患者の一人が殺したことが記されており、「見事に」と表現されている。この無法な残虐行為に対して、医師である軍医大尉がいささかの反省も悔悟の情も示していないのは驚くべきである。

日本軍兵士のすべてが悪逆無道だったわけでは決していない。しかし、日本軍兵士のすべてが正しくて人道的だったわけでも毛頭ない。戦闘中だったからやむを得なかったなどと弁解できるものではなく、戦争が多くの犠牲者を出した事実は存在しているのである。

## ●大阪大空襲の記憶

1945年の3月13日から14日にかけての記憶は、当時大阪に住んでいた者にとって永遠である。60年前の13日の深夜から、翌14日未明にかけて、大阪はB29の大空襲にさらされた。空襲警報下の大阪は、すべての明かりを消して暗黒の街と化していた。西方、大阪湾から侵入した一番機が照明弾を投下するや、街はたちまちにして白昼のように明るく浮かび上がった。あとは、B29の跳梁にまかせるのみだった。

はじめのうちこそ、日本軍の探照燈が敵機を捕捉し、

迎撃戦闘機がほんの一機、二機、挑んでみせたが、全然歯が立たない。対空砲火もほとんど無力。次から次へと現れるB29は、雨あられのように焼夷弾を投下し、市街地を火の海と化しては東の空へ去っていった。火の豪雨の3時間半が過ぎたあと、大阪はなおも燃えさかり、くすぶり続けた。

B29部隊の攻撃目標は大阪市街地中心部であり、船場・島の内ビジネス街と住宅地やミナミの歓楽街が焼き払われた。50万人が家を失い、死者は4千人と推定される。民間人（非戦闘員）が住む市街地の壊滅を図った無差別爆撃（地域爆撃）であった。

## ●戦後60年は節目の年

戦争が終わって、外地から帰国した復員の兵士たちが大阪駅に降りたとき、あたり一面焼け野原の彼方に難波の高島屋が見えたという。大阪のキタからミナミが完全に見通せたのである。空襲で大阪の主要部分はみごとに焼き尽くされ、繁華を誇った街は廃墟と化していたのである。大阪市の人口は325万人から111万人に激減していた。大阪だけではない。東京も横浜も名古屋も神戸も、広島も長崎も、そして尼崎も西宮も明石も姫路も岡山も、高松も今治も松山も宇和島も高知も徳島も、堺も和歌山も、宇治山田も津も四日市も桑名も、福井も敦賀も、全国70都市が壊滅した。

B29数百機による雨あられのような焼夷弾投下は、

大阪の市街地をたちまちにして火の海に変えた。暗闇に猛煙がたちこめ、熱風がうす巻く中で、真っ赤な火炎が全市をおおった。想像を絶する炎熱地獄の中に何十万人もの市民がたたき込まれた。黒い雨が降り、雷鳴がとどろいた。昨日のここのように思う。一生忘れられない体験である。

1945年というのは戦争の終わった年であるとともに、日本の都市が空襲で徹底的に破壊された年である。今年はいれから60年。空襲の中を生き残った私たちは節目の年を迎えて、戦争と平和について大いに語らなければならないと思う。

## ●戦争のリアリティ

20世紀は戦争と虐殺の世紀であった。アジア・太平洋地域もまた戦争と虐殺を体験したが、このような大きな不幸は、日本による台湾・朝鮮等の植民地支配や侵略が一因である。だが、戦後の日本では、長いあいだ、植民地支配や侵略などの事実を戦後世代にほとんど伝えなかった。

21世紀もまた、戦争と虐殺で幕があけた。恐ろしい時代がやってきたと私は思う。この状況を克服するため、戦場のリアリティを知り、戦争の被害を実感することで、戦争美化を受け付けられないマインドをつくるのが大切であり、戦争を知らない世代に「平和の尊さ」を引き継いでいくことが必要なのである。

## 用語解説

### 「大阪大空襲」

大阪は1944年12月から終戦前日の8月14日まで50回を超えるアメリカ軍の空襲により焼け野原となり、大きな被害を受けました。

このうち、B29が100機以上の規模で来襲したのが計8回あり、これを「大阪大空襲」として大阪国際平和センター（ピースおおさか）の資料では示されています。

大阪府警察局「大阪府空襲被害状況」(1945(昭和20)年10月)によると大阪への全空襲の被害は

被災家屋：	344,240戸	被災者：	1,224,553人
死者：	12,630人	重軽傷者：	31,088人
行方不明：	2,173人		

となっています。(出展「展示のてびき」大阪国際平和センター(ピースおおさか)発行)

### 「焼夷弾」

大阪空襲の主役を果たしのが、木造家屋が密集する日本の都市攻撃用にアメリカ軍が開発したM69油脂焼夷弾です。

直径8cm、長さ50cmの細長い金属筒の中にナパーム剤(固形油脂)が詰め込まれていて、着地と同時に信管が作動して頭部の炸薬が爆発し、ナパーム剤が撒き散らされ、家の壁や天井にくっついて激しく燃えました。その金属筒を19個ずつ2段に束ねて内蔵したのがE46(M19)、E28、E36集束(クライスター)500ポンド焼夷弾です。(出展：「展示のてびき」大阪国際平和センター(ピースおおさか)発行)

てきだんとう

### 「擲弾筒」

近接戦闘用の小型爆弾を発射する筒の武器(『大辞林』三省堂)

## 「大阪空襲死没者を追悼し平和を祈念する場(平和を願うモニュメント)」

「大阪空襲死没者名簿」の作成を機に、この名簿を収納し、空襲死没者を追悼するとともに、恒久平和を祈念するため、広く府民等からの浄財を募って、戦後60年にあたる本年8月に「大阪空襲死没者を追悼し平和を祈念する場」がピースおおさか(大阪国際平和センター)に完成する。